

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルにおける接客技法としての歌：
ホストとゲスト (伝統と近代の相克：
アジアとヨーロッパ)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5635 |

IV 伝統と近代の相克——アジアとヨーロッパ

I

モンゴルにおける
接客技法としての歌



ホストとゲスト

小長谷有紀

一 はじめに

研究者であれ、観光客であれ、異文化のなかでしばらくすごしていると、現地の歌をおぼえることができる。次にかかげる歌は、わたしが中国内蒙古自治区に留学していたあいだにおぼえた歌の一つである。(注¹) オラト地方の民謡で、〈白鳥〉と題されている(地方の名称については、図1を参照のこと)。

まっ白な白鳥たちが

竹のある湖でもぐっている、ホー

遠方からわたしの客人が到着したよ

夜をあかし、昼をすごして宴をはってすごそう、ホー

灰色のまだらの鶯鳥たちが

柳のある湖でもぐっている、ホー

想っていたわたしの兄弟が到着したよ

夜をあかし、昼をすごしてから旅立つのでしょうね、ホー

とても白い白鳥たちが

透明な湖でもぐっている、ホー

親類や縁者が到着したよ

夜をあかし、昼をすごして宴をはってすごそう、ホー

金色のまだらの鷺鳥たちが

北の湖でもぐっている、ホー

遠方の親戚たちが到着したよ

夜をあかし、昼をすごして宴をはってすごそう、ホー

このように、歌詞は、きわめて単純なレトリックの繰り返しからなっている。常にまず、飛来してきた渡り鳥がゆっくりと水辺でくつろぐ風景がえがかれ、その風景を来訪客にたとえるのである。

こうしたレトリックは、メロディにおいてさらに明白にあらわれている。というのは、歌詞のほうが一連四行ずつで頭韻をふんでまとまっている一方で、メロディのほうは二行ずつ同じラインを繰り返すからである。こうした

人である。ホストは、ゲストを渡り鳥にたとえて、ゆっくり楽しんでいけとすすめている。これは、「接客の歌」にはかならない。

このような接客の歌をおぼえることになるきっかけは、いうまでもなく、「接客の席」である。宴席すなわちう

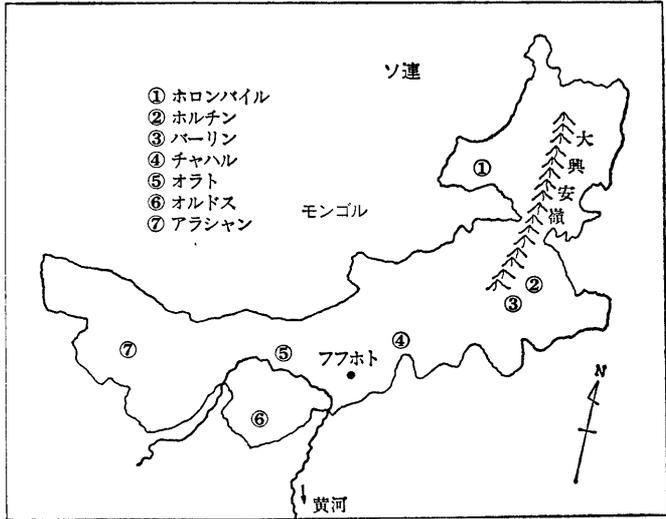


図1 中国内モンゴ自治区



楽譜1 〈白鳥〉のメロディ

メロディの反復によって、渡り鳥と客人とのアナロジーは明瞭である(楽譜1参照)。

この歌そのものがどれほどの歴史をもつのかは不明であるが、その単純な構成をもつ美しさゆえに、親しみ深い歌としてひろく内蒙古一帯に知れわたっている。もちろん、モンゴルの他の歌と同様に、頭韻をふむ仕立てが、よりいっそうフレーズを記憶しやすくしている。

この歌のなかには、あきらかにゲストがいる。遠方の親戚などの客人たちである。一方、歌っているのは、ゲストをむかえたホストすなわち家

たげの場である。「うたげ」において歌が登場し、「接客」の歌がうたわれる。この事実こそは、音楽と観光との本質的關係をさぐるうえで、一つの重要な糸口になるのではないだろうか。日本語での語源がまさに示すように、歌があるからこそ、うたげと呼ばれる。うたげはしばしば接客の場である。そのような接客が産業化すると、観光になりうる。このように、音楽と接客、接客と観光は、いずれも密接な関係にあるように思われる。本稿は、こうした視点にたつて、モンゴルにおける接客の歌をいくつか紹介するものである。

ところで、モンゴルの歌については、すでにかなり膨大な資料が刊行されている。とりわけ、内蒙古自治区に関しては、モンゴル人民共和国に比して理論的研究が一般におくれているもの、歌詞をメロディとともに地域ごとに集めた書物が数多く出版されている。ここでそれらすべてを一括してあつかうことはできないほどである。本稿では、それらの書物のうち、日本で入手しやすくなった時期のごく初期に刊行されたものをとりあげることにする。^(注2)

二 接客技法としての歌

モンゴルにおける「接客の歌」を具体的に紹介するにさきだつて、モンゴルにおける「接客」あるいは「もてなし」の全体的な概要を言及しておく必要があるだろう。^(注3) 客人として充分な接客行動を期待するためには、まず客人のほうで、しかるべき行動をとらなければならない。例えば、簡単なおみやげを用意し、おみやげには、赤い紙も

しくは赤い染料を用いて包む、あるいは赤い糸などを結ぶといった決まりごとである。さらに、到着したとき、家の西側から近づくなどという約束ごともある。一種の儀礼的なこれらの行為が、どのような意味を担っているのか、また時間的にどれほどさかのぼりうる伝統的なものであり、空間的にどれほどひろがりをもつ規範的なものであるのか、といった諸問題については、今後の詳細な検討を要する。ここでは、一般に伝統的かつ規範的なしきたりとして容認されている範囲内で、次のような接客の様相があげられる。

まず、挨拶とともに、かぎタバコを交換すること。どのような相手であれ、季節的に可能なかぎり乳茶をふるまうこと。乳製品が相当のもてなし品として重視されること。正月や、年男の祝いなどの、いわゆるハレの場においては、ハダクと呼ばれる絹布を礼品としてささげること。そのような場では、しばしば肉もふるまわれること。肉のなかでも最上は、煮た羊肉を一頭分つみあげて献じること。このヒツジの煮物のもりつけ方や食べ方に細則があること。おみやげのおかえしが必要なこと。酒はしばしば歌とともに献じること。客をよるこぼせるために、歌や楽器の名手が呼ばれること、などである。

モンゴルでは、知人、親戚などがもてなしを受けるばかりでなく、見知らぬ者あるいは乞食などももてなしを受けることができる、といわれている。たしかに、わたしがフィールド調査として牧民宅に滞在している間にも、見知らぬ者が頻繁に訪れ、彼らに対しても乳茶などがふるまわれていた。しかし、ホスピタリティを自慢とするモンゴルであっても、見知らぬ訪問者にまでむやみに酒や肉を提供することはない。

こうした接客の様相は、全体としてひとつのまとまりを構成している。ひとつひとつの行為をいま、「接客技法」と呼ぶと、相手の質や、場の質に応じて、それらの技法のうち採用されるべきものとそうでないものがあり、全体は「接客技法の体系」とでも呼びうるまとまりになっている。「接客技法の体系」が、当該文化のなかで維持さ

IV ● 1 モンゴルにおける接客技法としての歌

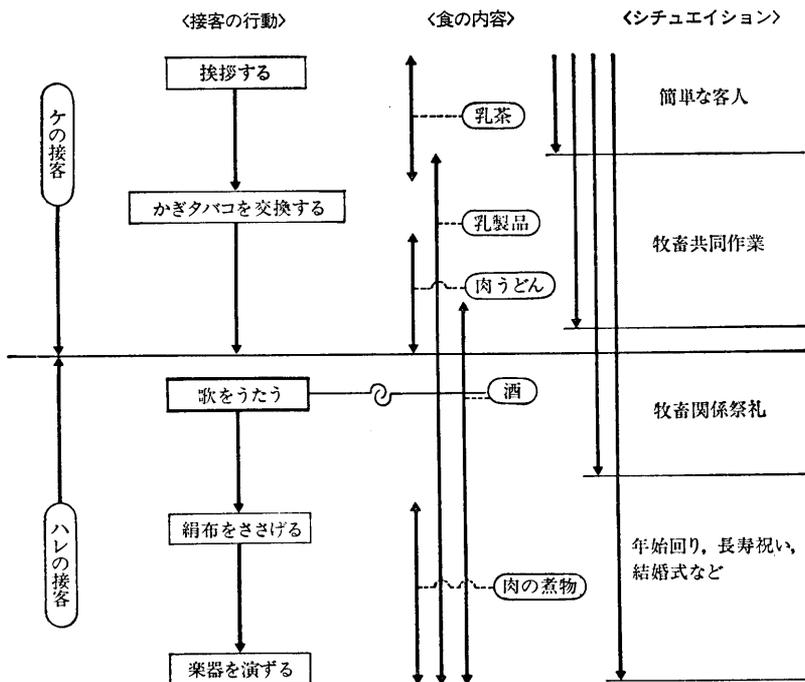


図2 接客技法のスペクトラム

れている。

この「接客技法の体系」においては、疎遠な相手ほど簡略に扱い、親密な相手ほど念入りに扱うというスペクトラムがあると思われる。ところが、疎遠な相手であっても、場の性格如何によっては、念入りな扱いを受けることもある。例えば、結婚式に偶然あらわれた見知らぬ客は、粗略に扱われることはない。ホストとゲストのあいだの関係と、場の性格の両者によって、接客の様相が決定されるのである。

上述したいくつかの「接客の技法」それぞれを要素とみて、それらをいま、ひとつのスペクトラムの上にあえて一列として体系化をここらみると、図2のようになるであろう。

接客の技法は、食にかかわる「食の内容」と、そうでない「接客の行動」とに大別される。その簡単なものから複雑なものへと並べたも

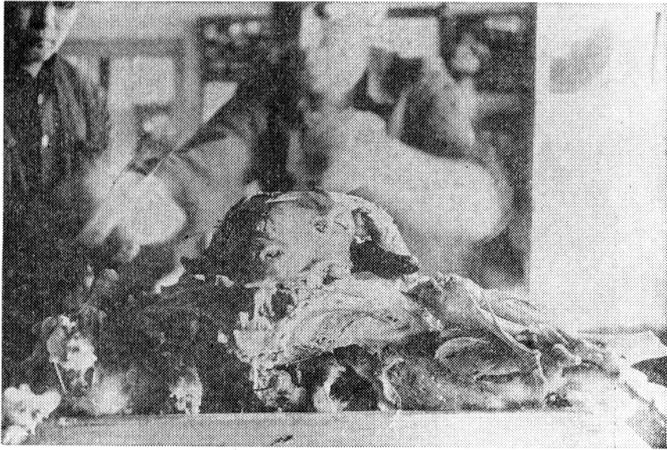


写真1 内蒙古自治区イフジョー盟ウーシン旗の牧民宅における接客風景。シュースと呼ばれる羊肉の煮物

のが、スペクトラムである。対応される食の内容は、このようなスペクトラムにおいていわば段階的指標になっている。

まず、日常的な乳茶が、あらゆる客に提供される。次に、多様な乳製品がある。しばしば乳茶と同時に提供されるものの、実際のところ乳製品は客の質が問われた結果、提供されている。さらに詳細には、どの乳製品を対応するかという選択をホストはゲストに対して行なっている。それでも、このような乳をめぐる食品の対応は、いまだケの段階にとどまる。さらに肉うどんなどの料理が提供されれば、かなりハレの様相が強くなり、その最たるものが、シュースと呼ばれる羊肉の煮物一頭分である。酒は、すでに肉うどんなどの料理の段階で登場する傾向をもつ。また、シュースを煮た汁をつかって、雑炊が最後にだされることもある。

羊肉の煮物が登場するとき、シュージの頭がいちばん上に置かれ、さらにそこに、乳製品もしくは羊肉の脂肪が一片そえられる。羊肉の煮汁をつかった雑炊には、しばしば酸乳をくわえて味がつけられる。したがって、乳と肉というモンゴルにおける食文化の二大要素は、並存しうる。けっして排他的関係にあるわけではない。ただし、乳から肉へというイメージで、対応のスペクトラムを理解することは可能である。ヒツジを一頭解体するごちそうは、接客技法のひとつの極点であり、

乳製品などは簡単に提供できるからである。

ホストとゲストの相互関係と場の性格とを総合して、いま仮にシチュエーションとしておく。スペクトラム上に並べた接客技法に対応させて、シチュエーションもまた並べることができる。単なる訪問客、牧畜の共同作業、さらにその祭礼、年中行事、通過儀礼など多様なシチュエーションが想定される。これらを厳密に、段階として峻別することはむずかしく、きわめて連続的ではあるが、大別して、「ケのもてなし」あるいは「ケの接客」と、「ハレのもてなし」あるいは「ハレの接客」とに二分しうるであらう。

「ハレの接客」では、肉や酒がともない、それらを献ずる際にはしばしば歌がそえられる。すなわち「うたげ」と化す。「ケの接客」では、歌にみちびかれて肉や酒が提供されることはない。つまり、きわめて連続的にみえる「接客技法の体系」も、「ハレ」と「ケ」とを区分する指標として、歌が重要な意味をもつのである。モンゴルのうたげの歌をいくつか引用しながら、歌が登場する場合の接客について、より具体的に想定しておく。いずれも、便宜的に第二連までの訳出にとどめておく。

まず、ホルチンおよびバリーン地方の民謡として、次のような歌がある。なお、ハンガイとは、森林ステップを意味する一般名詞である。

〈西ハンガイ〉

西ハンガイの雉たちは

柳のなかでさわぐ

小さな娘をむかえて宴をはり

われわれみなで楽しくすごそう

北ハンガイの雉たちは

竹のなかでさわぐ

運命の娘をむかえて宴をはり

われわれみなで楽しくすごそう

これは、娘をむかえる場面、つまり婚礼におけるうたげの歌である。
次の民謡は、オラト地方の民謡である。

〈羊肉を献ずる歌〉

ヒツジの煮肉を献じよう

ネヨネヨダー

ホドであるあなたたちに拝謁しよう

ネヨネヨダー

去勢オスヒツジの煮肉を献じよう

ネヨネヨダー

偉大なあなたたちに拜謁しよう

ネヨネヨダー

第一連の歌詞にあるホドとは、姻戚にかかわる親族名称である。夫の父親と、妻の父親が、相互にホドと呼ばれる関係になる。この語が用いられていることから、おそらくこの歌も婚礼の際に歌われるものと思われる。

次の民謡は、ホロンバイル地方のオルティン・ドー（長唄）である。日本の追分に似たゆっくりとしたリズムと音階をもつ。

〈栗毛の駿馬〉

奔走する小さなみごとな栗毛を

谷からつかまえて乗ろう

尊敬すべき徳ある多くの人々と

楽しくすごして宴をはろう

この歌詞からは、まだ人を乗せたことのない馬をつかまえて調教するという牧畜作業がうかがわれる。こうした作業は、ウマの烙印、たてがみ切り、去勢などとともに、しばしば共同作業として実施され、また一種のフェスティバルと化す性格をおびた生業行為である。

次の二つの民謡は、アラシャン地方のものである。一般にアラシャン地方は砂漠が多く、ウマの少ない地域であ

るにもかかわらず、ともにウマにかかわる。前者は長唄である。

〈細い小さな栗毛〉

細身の小さな栗毛を

精巧にやせさせて乗る

年の小さな弟たち

こちらに座って楽しもう

〈西の峰〉

西の峰に营地あり

营地をみたす馬群あり

若輩ものが兄であるあなたたちと

酒・馬乳酒で宴をはろう

東の峰に营地あり

芝をみたす馬群あり

心臓の兄であるあなたたちと

杯にはいった酒で宴をはろう



写真2 内蒙古自治区イフジョー盟にあるチンギスハン陵での接客風景。チンギスハンには3杯を献酒する。客には2杯の酒を、歌とともに献じる

前者は、ウマを調教してやせさせるという旨が記されていること、またゲストとして少年たちがいることの二点から、競馬にかかわるものであることが知られる。後者は、馬乳酒を献じる歌である。馬乳酒については、その初

物を祝う祭礼すなわち初乳の祭りともよばれる。この歌の場合、そのような儀礼的な宴であるかどうかは不明である。たとえ、儀礼とは無関係であっても、モンゴルにおいて馬乳酒は一年の疲労をいやすための貴重な保養飲料であり、これを飲む機会にめぐまれることは、ことほぐに値する。したがって、うたげがもよおされても当然である。次のオラト地方の民謡は、まさに初乳の祭りを思わせ、儀礼的な宴を想定してもよいであろう。

〈繩に満ちて〉

繩に満ちた子ヤギ・子ヒツジ

繩をまわってあそんでいるよ

教養ゆたかな師であるあなたたちに

酒をささげて宴をはろう

繩に満ちた当歳駒、二歳駒

繩をまわってあそんでいるよ

位の高い兄であるあなたたちに

酒の上等を祝してささげよう

ただし、ヤギ・ヒツジの搾乳開始とウマのそれとでは、実際の作業としてかならずしも季節的に一致しない。実際の作業がずれているものの、多種類の家畜の初乳祭の状況がよみこまれており、それらの祭りで実際にうたわれている可能性は高い。

以上の数曲は、便宜的に選択したものであるが、うたげの本来の開催目的をより具体的に想定する材料にはなりうるであろう。当然ながら、婚礼などの人生における通過儀礼や、生業における家畜をめぐる儀礼などが、うたげになるべき、接客の場なのである。客人をまねいて行なわれるこのような儀礼の場、ハレの接客こそが、うたげと化す。すなわち、歌が必要不可欠な接客技法の一つとなる。歌がいかに重要な役割を果たしているかは、次の例に端的にしめされている。さきに引用した「繩に満ちて」の最終連である。

酸乳からでた蒸留酒の上等を

胸からでた声の上等を

兄弟全員に

酒の上等を祝してささげよう

酒と歌がまったく並行的に形容されている。ともにホストからゲストに献じられるべきものなのである。宴もたけなわになれば、ゲストがホストのもてなしに感謝しつつ歌をうたうことももちろんありうる。いわゆる返歌である。しかし、これまでみてきたように、うたげにとって本質的に必要不可欠な歌というものは、そもそもホストの側の接客技法としての歌なのである。

三 接客の歌の技法

接客のなかでも宴会がもよおされる場合、すなわちうたげにとって、歌は本質的に不可欠な要素である。モンゴルの場合、歌を献じることができなければ、酒や肉を献じることができないほど、両者は一体化しており、接客技法の体系として密接な関係をもっていると思われる。そのようなうたげの歌とは、いったいどのようなものであるか。歌によっていかにもてなそうとするのであろうか。

さきに提示した書物から、さらにいくつか引用してみよう。その書物の最初にチャハル地方の民謡があげられており、そのうちの最初の六曲が、いずれも献酒の歌である。まさにうたげの歌といえる。一連数行からなり、数連にわたって続く。歌い手の言語操作能力によっては、さらに幾連にもわたって続きうるのだが、まずここでは、最初の二連までにとどめて記す。

へまげをつけた栗毛

まげのある栗毛を

ゆっくりとあゆませてやってくる

陶磁器にはいった酒を

献じ、ささげて宴をはろう

若オスの赤毛に

乗って乗ってやってくる

果実のある良い酒を

献じ、ささげて宴をはろう

へ雪をいただく白き山

雪をいただく白山の頂上に

白い獅子は威厳あり、威力あり

時の祝福により出会った兄弟たちに

美酒をささげて御挨拶

へまだらのメウシの滋養

IV ● 1 モンゴルにおける接客技法としての歌

ヨモギの草の厚きところに

馬牛をはなつた

はるか遠くからきた奥様あなたたちには
ゆっくりとじていただいて、めしあがれ

窪地の芝の厚きところに

羊牛をはなつた

遠方からきた奥様あなたたちには
杯をささげささげて、めしあがれ

(正4)
〈組曲〉

けだかき運命をもち

安寧喜悦の顔をもつ

ゆっくり献酒して、宴をはろう

時にであって挨拶し、

透明な顔を見て

おだやかにすごし、宴をはろう

〈涼しき良きハンガイ〉

涼しき良きハンガイに

透明な泉の流れあり、われら故郷

心に愛あるあなたたちと

座っていっしょに宴をはらう、われわれ

しっかりした平原の緑は

風でたちさわぎゆれうごく、われら故郷

大勢のすべての人々と

いっしょに全員で楽しもう、われわれ

〈聖なるチンギス〉

聖なるチンギスのつくった

全モンゴルのしきたり

色つきの良い酒を

全員に祝福してささげよう

海のチンギスのつくった

全モンゴルのしきたり

まったくすばらしい酒を

全員に祝福してささげよう

以上の六曲は、「組曲」という一曲をのぞいてすべて、具象的なイメージをとまなうタイトルが付されている。「まげをつけた栗毛」とは、競馬に出場するためにたてがみをしばった、黄色い毛並のウマをさす。「雪をいただく白き山」の、具体的な地名は不明であるが、その風景は明瞭であろう。「まだらのメウシの滋養」の滋養とは、牛乳をさしている。乳製品一般を献じているものとみてもよいが、ここで紹介しなかった後半部ではあきらかに乳酒が献じられている。「涼しき良きハンガイ」のハンガイとは、先述したように地形用語であり、豊饒な大地という意味にも置換しうる。「聖なるチンギス」は、いうまでもなくモンゴル民族の歴史的英雄をさしている。このように、ウマ、山、牛乳、チンギス・ハンなどがタイトルにあらわされており、歌詞でもまた、それらが具体的にえがかれる。

このように、発話の内容はそれぞれの歌において表向きにはかなり異なっている。しかしながら、いずれの歌においても、各連の後半部では、結局のところ献酒が表明されている。タイトルもふくめて、各連の前半部は、歌の表向きの内容が表現される部分である。そのような表層部分では、しばしば、ふるさとの風景や豊饒をもたらす家畜、民族英雄などがとりあげられる。たとえば、それが何であれ、酒を献じることによって、客人をもてなすための歌であることにはかわりはない。換言すれば、客人をうまくもてなすために、このように表向きのテーマをかえてい

る。じょうずに酒をすすめるためにこそ、多様な言語的工夫を用いているのである。

ここでとりあげた歌は、モンゴルのうたげの歌のなかのごく一部にすぎない、それでもなお、うたげの歌におけるレシピー、一種の法則性を了解することができよう。まず第一に、歌の目的が献酒すなわち接客にあること。第二に、献酒という接客の目的のもとに、多様なテーマを設定し、レトリックを成立させること。換言すれば、多様なレトリックを駆使することができなければ、接客ができないのである。いわば「接客のための修辞学」が要求される。

接客のための修辞学をより具体的に理解するために、次に一例をとり、詳細に分析してみよう。さきに引用した〈雪をいただく白き山〉をその典型として再度とりあげる。

雪をいただく白山の頂上に

白い獅子は威厳あり、威力あり

時の祝福により出会った兄弟たちに

美酒をささげて御挨拶

西の泉の水のように透明

蓮の華のように聡明

時の祝福により出会った兄弟たちに

透明な酒をささげて御挨拶

東の泉の水のように透明

芝に咲いた花のように聡明

心臓の祝福により出会った兄弟たちに

杯にはいった酒をささげて御挨拶

北の泉の水のように透明

窪地に咲いた花のように聡明

運命の祝福により出会った兄弟たちに

杯にはいった酒をささげて御挨拶

南の泉の水のように透明

草地に咲いた花のように聡明

前からの祝福により出会った兄弟たちに

色つきの酒をささげて御挨拶

タイトルはあくまでも山とあるものの、次に泉に転じており、そこから東西南北というパターンを生んでいる。各連において、前半部で自然を賛美し、いわば客を比喩的に賛美して、後半部で接客のための呼びかけを行なう。

このように、「自然賛美」を「接客の呼びかけ」と対に仕立てる構成をとる。こうした対は、メロディにおいても具現されている。本稿の冒頭にかかげた〈白鳥〉がそうであったように、自然賛美の前半部と、接客のよびかけの後半部とは、同じメロディを反復する。^(注5)つまり、メロディの単位を二つかさねることによって、自然賛美に依拠した接客の呼びかけという一つの意味単位が構成されるのである。言葉の技法にくわえて、メロディ・ラインという音の技法が見出される。

このような対をつくる技法として、頭韻をふむというモンゴルの口承文芸の伝統がいかされる。例えば、第一連の四行はそれぞれ、*ca, ca, ca, sa* である。c と s はモンゴル語でもしばしば音韻交代をみせる子音であることから、これらはほぼ同音なのである。また、第二連のそれは、すべて *ba* であり、第三連はつづりにおいては *ze, zu, zu, zu* であるが、実際の発音ではすべて *z* の音に近くなる。以下もまた同様である。この感性を、日本語で歌詞にうまく訳出することはできないが、同じ音で始めることによって、次々と語彙をひっぱりだしてきて、一連を構成する。言葉を選択する技法として、このような言葉のなかの音の技法があり、接客の歌の修辞学を洗練させているのである。

対をなした一連は、さらに何連もつなげられていく。つなげるための技法も存在する。言葉のなかの音の技法にくわえて、類似概念を反復したり、類似概念に置換するというものである。東西南北の方位のほかに、地形、五種の家畜、色などの概念のグループのなかで、語彙を推移させて、次の連を展開していくのである。結果として、違う音が選ばれながらも、語義の類似した語彙を展開させている。選ばれた音に即して、酒を別の表現にいかえるといった類似概念の反復は、同義で異音の類義語を用いていることになる。

以上のように、「接客の歌の修辞学」には、連の内部的な規則と、連同士のあいだでの規則とを見出すことがで

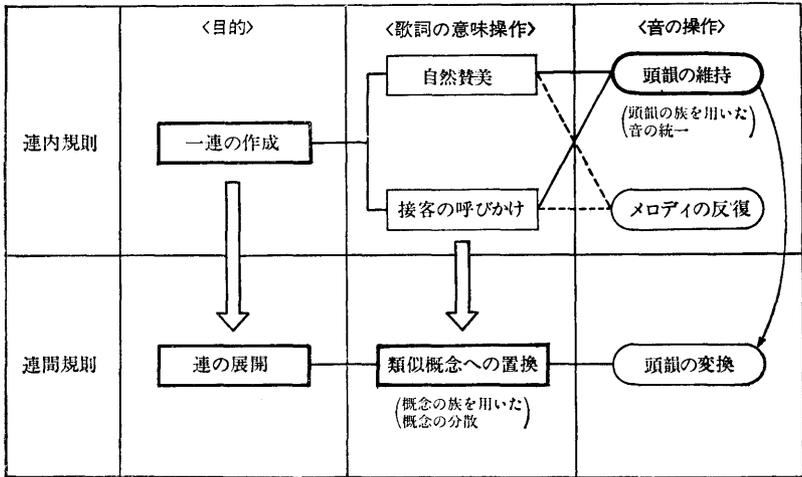


図3 接客の歌の技法

きる。まず、一連をつくるための「連内規則」として、自然賛美と接客の呼びかけからなる対をつくること、対はしばしば同じメロディであること、それらをすべて頭韻によって統一すること、があげられる。頭韻をふむことによって、これらの連内規則を具現するのである。頭韻はさらに、連間の規則にもかかわる。すなわち、連をふやすための「連間規則」は、類似概念を展開させていくことにあり、このとき別の頭韻の連がうまれる。図3に示したように、規則にしたがって、歌詞の言葉の意味と音とを同時に操作するのである。

複雑な技法というよりもむしろ、単純な言葉(音)の修辞学であらう。頭韻をふむことで、一連を完成させ、概念を展開することで連をふやす。「音の統一」と「概念の分散」によって、接客の歌をつくりだすのである。頭韻を維持する「音の統一」においては、頭韻を同じくする語のグループ、いわば「頭韻の族」と呼ぶうる頻出用語をみとめることができる。一方、類似概念へ置換していく「概念の分散」においては、方位や色などの、いわば「概念の族」というまとまりをもつ頻出用語がある。後者のグループは、頭韻を異にしているために、前者のグループとともに同



写真3 内蒙古自治区イフジョー盟ウーシン旗の牧民宅における接客風景。この地方では、一般の牧民宅でもしばしば楽器がそなえられていて、来客の際のもてなしに用いられる

時にマトリックスにまとめることができる。表1に、頻繁に用いられる語彙をいくつか選んで、例としてまとめておいた。わずかな語彙を簡単に示した便宜的なマトリックスではあるが、「接客の歌の修辭学」の概要を了解することができよう。

接客がうたげとしてもよおされるために、歌は欠かすことができない。うたげの歌は、接客の歌である。モンゴルの場合、歌を献ずることは、酒や肉を献ずることとレトリックのうえで同義であり、接客技法の体系にくみこまれている。それゆえに、接客の歌を多様に維持するための技法が要求される。その技法はけっして複雑なものではない。むしろきわめてポピュラリティの高い技法であるといえる。もちろん平易ではないが、通俗性をそなえているがゆえに、多様な接客の歌を展開することができる。うたげにおいて次々と歌を登場させ、接客を遂行することができるのである。

モンゴルの場合、レトリックのためのテーマとして選択される素材は、いわゆる自然賛美のなかでもとりわけウマがしばしば用いられる。このことは逆に、一見ウマの歌であるようにみえても、実際には多様な内容をもちうることを意味する。恋愛、失恋、結婚、別離など人生のあらゆる局面を、ウマによって表現しうるといっても過言ではない。きわめてモンゴルらしい、接客のための修辭学が発達

表1 接客の歌の修辞学

| 連内規則 | | 連間規則 | | | | | | | | | | |
|-------|--------|-----------------------|-------------|----------------------|---------------------|--------------|-------------|------------------|-------------|------|-----|----|
| | | 概念の族 頭韻の族 | 方位 | 季節 | 色 | 毛色 | 植物 | 動物 | 地形 | 類義語 | | |
| | | | | | | | | | | 酒 | 杯 | 遣い |
| h | ho/hu | ホイト(北) | | ホン(白) | | ホルス(竹) | ホニ(羊) | ホンゴル (窪地) | | ホンダガ | ホル | |
| | ha | | ハバル(春) | ハル(黒) | ハリヨーン (黒たてがみの栗毛) | ハルガナ (灌木) | | ハンガイ (森林ステップ) | | | | |
| | he | | | | ヘール (栗毛) | | | ヘール (ステップ) | | ヘム | | |
| a | | アル(背側) | | アルタ(金) | アラク (まだら) | アギ(蓬) | アドー (馬群) | | アルヒ アイラク | | アルス | |
| ö/ü | | ウブル (腹側) オムノ(南) | ウブル(冬) | オンゴ(色) | | オプス(草) | ウフル(牛) | | | | | |
| b | ba | バローン (西) | | バラー (ものかけ) | | バダム(蓮) | バルス(虎) | | | | | |
| | bo/bu | | | ボル(灰) ボーラル (灰) | ボル(葦毛) | ボルガス (柳) | | ボラク(泉) | | | | |
| j | jo/ju | | ジョーン (夏) | | | | | | | | | |
| | jö/jü | ジューン (東) | | | ジュス (毛色) | ジュレク (芝) | | | | | | |
| n | na | | ナマル(秋) | | | ナルス(松) | | ナマク (沼地) | | | | |
| s, ch | sa/cha | | | チャガン (白) | | | | | サルホード | | | |

するわけである。

修辞学で採用されるテーマにのみ、モンゴルらしさが表出されているわけではなく、そもそも、接客のための修辞学をかなり発達させていること自体が、モンゴルの現象であるかもしれない。人口密度の稀薄な草原に遊牧するために、いわば、すべての人々が人里はなれている。こうした居住形態は、おそらくモンゴルにおいてホスピタリティを増大させずにはおかないのではないだろうか。

四 おわりに

本稿では、モンゴルの民謡を素材にして、接客の技法としての歌の意義を確認し、そしてそれゆえに不可欠となる歌の技法を概観した。ここでとりあげたモンゴルの民謡は、きわめて部分的なものにとどまる。モンゴルの歌のすべてが接客にかかわるものでもない。歌のジャンル、メロディ、歌詞の内容などをさらに詳細に考察することによって、モンゴルの歌の全容が理解されるであろう。そのとき重要な課題となるのは、地域の変異である。

接客にとって歌がいかに重要な要素であるかを示す目的で限定して選択紹介した素材だけをみても、かなりの地域差が存在している。第三節で言及したチャハル地方に関しては、とりわけ接客の歌が数多い。チャハル地方は、中国内蒙古自治区のなかでも南部にあり、漢族との接壤地域である。いわば異質なものとのかかわりの多い地域であることが、接客の歌を発展させているのかもしれない。このような地域差の問題は、時代差の問題とともに今後

の課題となろう。特に、接客（もてなし）の観光化とかわる課題である。

文化のなかでとどめられていた接客技法が、ひとたび家庭をこえ、親族をこえて、近代社会における産業として確立されれば、それは観光である。すると、接客技法の一つであった歌もまた観光化する。その例として、オルドス地方の歌をあげることができる。そこは、現在の中国内蒙古自治区のなかで国内外の観光客を最もたくさん受容している地域である。チングス・ハンの遺品と称する品々をおさめた廟があるために、多くの観光客が訪れる。そこで最も頻繁に歌われるのが、次の〈銀杯〉である（楽譜2参照）。

〈銀杯〉

銀の杯に満つれば良し

良きことなり

永遠なるあなたたちと宴をはろう

良きことなり

金の杯に満つれば良し

良きことなり

兄弟であるあなたたちと宴をはろう

良きことなり

羊の煮肉を献ずれば良し

良きことなり

宿営して大勢の人たちと宴をはろう

良きことなり

去勢オスヒツジの煮肉を献ずれば良し

良きことなり

偉大なるあなたたちと宴をはろう

良きことなり

胡弓や琴をひけば良し

良きことなり

姻戚であるあなたたちと宴をはろう

良きことなり

箏や琴をかなでれば良し

良きことなり

祝福のある兄弟たちと宴をはろう

IV ● 1 モンゴルにおける接客技法としての歌



楽譜2 〈銀杯〉のメロディ

良きことなり

この歌の場合は、一連のなかでメロディまで対になってはいないが、句はあきらかに対になっている。酒、肉、歌と猷するものを推移させて、連を展開させている。同じメロディでいくつかの歌詞バージョンがあり、右の例はいちばん普及しているものである。観光による創造の結果、きわめて総合的な完結的なものができあがっているといえよう。さらに、類似のメロディがいくつもつくられて、カセットテープとして販売されている。観光が歌をつくる、あるいはまた歌が観光資源になる、という現代の産業化現象をみとめることができる。

本稿では、モンゴルに限定して、接客と歌との関係をさぐったが、モンゴル内の地域的変異および観光化ばかりでなく、他の文化とも比較しうるであろう。なぜなら、本稿で上述してきた現象はかなり普遍的なものと考えられるからである。

一般に、観光現象は、次のような三つに分類して把握することができよう。(1) 産業化以前の社会の内部において発生している観光現象、(2) 産業化以前の社会が産業化社会と接触することによって発生する観光現象、(3) 産業化社会内における産業としての観光現象の三つである。これらのすべてをあらゆる視点からとりあげても、それは観光学にすぎない。あらゆる視点から考察しても、けっして観光人類学として最善の方向であるという保証はない。すでに隣接諸分野において観光が扱われてきた研究史をふまえ

(注6) て、あらたに人類学として観光を扱っていく以上は、これまでの人類学が蓄積してきた、優れた視点、手法、概念などを利用していくことが必要である。

人類学の特質にもとづく成果を観光現象とつなぐうえで、重要な中間項となるのが、本稿で強調してきた「接客技法」あるいは「もてなし技法」^(注7)であろう。「接客(もてなし)」は、観光と音楽との関係ばかりでなく、観光と人類学の関係を理解するうえでも、有効な媒介概念となる。

観光の原点は、「接客」にあるといっても過言ではない。産業化以前の状態においても、それは確認される。もてなしをしないという法則もふくめて、接客の技法は文化によって体系化されている。ハレの要素があれば、接客の場は「うたげ」となり、「うた」が本質的な機能をもつことになる。その典型が、芸能神事であろう。最大級の接客といえ、神のもてなしであって、うまく供応することによって立ち去っていただくという拒絶さえも、もてなしになりうる。神を立ち去らせるため、あるいはよるこぼせるための、接客技法として、歌謡や舞踏が存在する。観光と音楽のあいだにひそむ密接な本質的關係は、「接客」をキーワードとすることによって、より明瞭に理解されるであろう。「接客の歌」というものは、文化のなかで醸成されており、そのなかでも、「異質なもの」へのもてなしにおいて、「接客の歌」が最も重要な機能をもつ。だからこそ、観光においてもまた音楽が登場するのだといえよう。

ところで、モンゴルにおいて、さよならの挨拶は双方同一ではない。とどまる人が「サイン・ヤバーレイ(良くお行きなさい)」というのに対して、旅する人は「サイン・ソীগーレイ(良くお座りなさい)」と応ずる。ここには空間を移動するゲストと、固定されたホストとが対照的な挨拶をかわす。あなたが、文化の壁をこえて遠くからやって来れば、かならずモンゴルの歌がきこえる。

(注1) 歌詞およびメロディについては、次の文献を参照した。Naranbatu 1979.

(注2) 前掲書をさしている (Naranbatu 1979)。なお、本稿で採用した曲目を一覧しておく、次のとおりである。

〈白鳥〉上巻、三〇一—三〇三頁

〈西ハンガイ〉下巻、八八三—八八五頁

〈羊肉を献ずる歌〉上巻、三二六—三二七頁

〈栗毛の駿馬〉下巻、一四〇七—一四〇八頁

〈細い小さな栗毛〉下巻、一六五六—一六五八頁

〈西の峰〉下巻、一六七八—一六八〇頁

〈繩に満ちて〉上巻、三二〇—三二二頁

〈まげをつけた栗毛〉上巻、一一三頁

〈雪をいたたく白き山〉上巻、四一六頁

〈まだらのメウシの滋養〉上巻、七一九頁

〈組曲〉上巻、一〇一—一一頁

〈涼しき良きハンガイ〉上巻、一二一—一三頁

〈聖なるチンギス〉上巻、一四一—一六頁

〈銀杯〉上巻、五四四—五四五頁

(注3) モンゴルの食文化に関するモンゴル語文献はきわめて多いが、それらを接客という枠組みで記述したものは少ない。内蒙古については、フレルバータルなど末尾に示したような文献が参考になる。

(注4) 原語はアソロ (asolo) である。辞書によれば、モンゴル族が宴会で演奏する一種の伝統的な組曲とあるが、具体的な内容については不明である。

(注5) 例えば、本稿でとりあげた民謡のなかで、一連の対句がメロディ・ラインにおいても反復形式をとる歌は、以下の

ものである。〈白鳥〉〈栗毛の駿馬〉〈細い小さな栗毛〉〈西の峰〉〈繩に満ちて〉〈雪をいただく白き山〉〈涼しき良きハ
ンガイ〉〈聖なるチンギス〉

さらに、メロディを詳細に検討すれば、単純な反復のほかにも、音の技法というべきものが存在しているかもしれない。
(注6) 例えば、地理学においては、当該地域に対する観光産業の及ぼす影響が多様な側面から従来あつかわれてきた(浅
香・山村〔編〕、一九七四年)。

(注7) 観光人類学において、接客(もてなし)は、しばしば「ゲストとホストの関係ないし相互交渉」あるいは「旅行者
とホストの取り引き」というような概念に置換され、理解されている。しかしながら、民族誌を渉猟した比較分析はま
だすすんでいないようである。わずかに刊行されたものとして、次のような文献が、主としてストレンジャー(見知ら
ぬ訪問者)のとりまじかいをめぐって議論している。Pitt-Rivers 1977.

【文献】

浅香幸雄・山村順次(編著)、一九七四年、『観光地理学』大明堂。

Kirelagatar, Uraneimeg, 1988, *Qorcin-u jang agai* (ワレルバートル、オランチメグ共著『ホルチン風俗志』)内蒙古人
民出版社、九三—九六頁。

蒙古族食譜編集委員会(編)、1987, *Mongol-un idegen tobriya* (『蒙古族食譜』)内蒙古科学技術出版社。

伊盟蒙語工作委员会(編)、1985, *Ordos nutug-un idegen umdagun* (『オルドス伝統飲食』)伊克昭盟蒙古語工作委员会。

Naranbatu, Rinčin (ed.), 1979, *Monggol arad-un dagun tabun jagu* (ナランバト、リンチン共編『蒙古民歌五百首』)上下
冊)内蒙古人民出版社。

Pitt-Rivers, Julian, 1977, "The Law of Hospitality", *The Fate of Shechem: Essays in the Anthropology of the Me-
dierranean*. Cambridge: Cambridge University Press.